

2022年2月、突如としてロシアがウクライナに侵攻してから1年が過ぎようとしている。拙文を書いている時点ではまだ和平への道は拓かれず、年末のクリスマス停戦もなく、ロシアが東方正教会のクリスマスに合わせて一方的に宣言した1月の停戦も、報道によれば宣言したロシア側が爆撃を続けていたようで、そのまま失効してしまつたという。

そもそもの疑問だが、いったいプーチンはこの21世紀の世に戦争を引き起こして何をしようというのだろう。

ようやく世界が、少なくとも先進諸国が、野蛮な戦争を放棄しようという機運になりかかったところでのウクライナ侵攻は、完全にその流れに逆行し、せつかく芽生えた人類の新たな進化に水を差す格好となつたように思えてならない。

だいたい人にいきなり殴りかかっておいて一方的に和解を申し入れても、そんなことが通るはずもなく、却って逆なでして反撃を食らうのがオチなのは自明の理である。

先進諸国は「話し合い」による問題解決に活路を見出す傾向にあつたと思ふし、そう信じたい。核兵器についても、実際に使用するという論点は消え、抑止力としての存在ばかりが目につくようになっていたし、徒にミサイルを開発し発射実験を繰り返す北朝鮮への世界の「冷たい目」は際立つてきた。

どうも米国を襲つた同時多発テロのあたりから、禁じ手、禁じ手、ではなくなつたように思える。「まさかそれはしない」という紳士協定が成立しなくなつてしまつているのだ。

紳士面をしたロシアの大統領が、武力を持つてウクライナに侵攻するという「蜜行」に及んだということは、紳士としての仮面をかなぐり捨てたというところで、先進諸国はその前提でこの元紳士を処遇することになるのは仕方あるまい。

それにしても、どのような意図と意志が働いたにせよ、これだけの尊い人命を奪い、破壊を重ね、資源を無駄遣いしたこと責任は免れない。

それが戦時という異常事態のものであつたとしても、その異常事態そのものを引き起こしたのが本人ならば何ら

免罪符は持つことはできない。

1年も経過すると、そもそも彼が何をしたかつたのかさえ分からなくなつてくる。

翻つて日本も、このご時世に防衛費を大幅に増額するのだというが、その財源を背負わされるのもお断りだし、それよりも何よりも、この21世紀の世に、鉄砲を担いでのことと戦場まで赴くなどもつての外、お断りである。

人殺しはバーチャルのゲームの中だけで沢山だ。人を傷つけるのは勿論、当方自身が傷ついたり、痛い思いをしたりするのもお断りである。

この先、どうしても戦争がやりたいならば、どうかメタバースの中でお願ひしたい。リアルで戦争をするなんて時代遅れだし前時代的なのだ。

それに、メタバースでの戦争なら、少しは科学技術やAI等の進化・発展に寄与でき、未来に繋がるかもしれないではないか。

今この瞬間にも、人が傷つき、血を流し、そして亡くなつていく。それが戦争なのだ。

一刻も早く、停戦ではなく、終戦となることを願うばかりである。

(溪)

月刊  
公論

2月号 第56巻2号

令和5年2月1日発行 毎月20日発売  
本体価格1,100円(税込) 送料87円

発行人 大中 吉一 編集人 林 溪清  
発行所 株式会社財界通信社  
〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町10-12 ボナフラワービル  
TEL.03-5379-5611(代) FAX.03-5379-5616  
印刷所 株式会社広済堂ネクスト  
取次店 日本出版販売/楽天ブックスネットワーク

- 直接ご購入をご希望の方は、本社までお問い合わせ下さい。
- 万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、お取り替えいたします。